

第2 教育研究団体の意見・評価

① 日本地理教育学会

(代表者 池 俊介 会員数 約500人)

T E L 042-329-7729

地 理 A

1 前 文

本年度も昨年度と同様、5つの大問構成で、各大問における出題テーマについてもさほど大きな変化はなかったものの、問題総数については30問と、昨年度より1問減となっている。地理という科目の性格上、地図や写真、統計など複数の資料を読み取り、解釈するのにやや時間を要することから、受験者の負担を多少なりとも緩和しようと試みたことの表れとも推察できる。後で示される「文章量や初見の資料が減少したことで、比較的取り組みやすい問題が多い」という指摘からもそのことを伺うことができる。それでも、60分間という限られた時間で、1問につき最大2分間という短い解答時間ゆえに、負担軽減と言えるのかどうかは議論の余地が残るところである。

問題形式については、地理的諸事象を組み合わせながら解答していくものが20問と全体の3分の2を占めている。もちろん、組合せ問題のみならず、単独の地理的事象について問う問題であっても、複数の資料を活用して諸事象を組み合わせたり、文章を読み取ることで真偽を判断したりするなど、思考・判断の程度を診断する問題が多数設定されている。次年度からスタートする新課程入試を意識し、コンテンツとともにコンピテンシーをも重視する傾向にあることが、ここから理解できる。

一方で、地理的な知識・技能、思考・判断を伴わない常識で解ける問題も散見されるとともに、先に述べた受験者への負担軽減を意図したからなのか、探究場面を想定した問題が第2問と第5問を除いて見られなかった。また、基本的な知識の有無によって正答率が下がることが予想される問題も多く、教科書に記載されている基本的事項を手がかりに、現代世界を理解するのに必要不可欠とされる個別的知識を整理し、概念的知識や課題発見へとつなげていくための基礎・基本に立ち返った地道な学習が必要とされることへのメッセージと捉えることもできる。

いずれにせよ、知識・技能と思考・判断の2つの資質・能力がバランスよく組み合わせられた問題が今後とも多数出題されることを望むものである。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問 地形図の読図と地理情報の活用、日本の自然災害と防災に関する大問である。地形図から地形をイメージさせる設問、新旧地形図から地域の変容を読み取らせる設問、地理院地図とグラフを結び付けた設問、気象衛星画像から自然災害を考えさせる設問、ハザードマップから避難行動を考えさせる設問と多岐にわたっているが、基本的な事項を問うものが多い。ただ問題文や選択肢と図表を照合させて解答を導き出すために時間を要する問題があり、思考力と判断力も問われている。難易度は標準的といえる。

問1 地形図とスケッチを対比させ、撮影地点を特定する問題である。スケッチの火山と周辺の山々の位置から、地形図上でどの方向から描いたかを考えさせようとしている。スケッチであるが、濃淡をもう少し鮮明にすると、火山より手前の様子が分かりやすい。湖沼につい

ては、地形図で河川が太線で強調されてヒントとなっているが、「地理A」の教科書では火山地形がほとんどなく、やや難しい問題であると考える。

問2 GISの利用方法についての問題である。「地理A」の教科書では、地理空間情報を複数のレイヤーに分け、地図を重ね合わせて分析することが示されているため、授業で具体的な事例を通して学習し、GISに対するイメージを持っていれば、解答は容易であろう。各選択肢の前半部分に書かれた地図から、後半部分の分析ができるかが問われている。

問3 新旧地形図を用いて、地域の変化を読み取る問題である。この問題を解くにあたって、河川の左岸と右岸を理解しているかが重要となる。このことは自明のこととされているせいか、高校地理教科書に記述はない。河川の左岸と右岸、地図記号と河川がつくる地形を理解していれば、解答は平易である。

問4 地理院地図とグラフを結び付けて考える問題である。初見の「光合成の活発度」をどう捉えるかが問われている。地図に見られる土地利用と植生、稲作時期か否かで植生が異なることに気付けば、解答は容易であろう。

問5 気象衛星画像からどのような自然災害が起こり得るかを考える問題である。「地理A」教科書には気象衛星画像とそれに関する自然災害の説明があり、解答は容易である。

問6 ハザードマップから避難行動を考えさせる問題である。①と②については、洪水ハザードマップ、③と④については、津波ハザードマップと見比べながら確認していけば、解答は導き出せる。

第2問 世界の「世界の生活・文化」に関する大問である。家畜の飼育との関係を様々な視点から問うており、家畜に特化しているのが特徴であるといえる。多くの問いで知識があることが絶対条件となるが、難易度は全体を通して易しいといえる。他の大問と同様に、図や資料の読み取りが求められ、思考力、判断力が問われる問いが多い。地図を用いた問いが、問2しかないことから、地図を用いた問いがもう少し多くても良いように感じる。

問1 羊と豚の大陸別の飼育頭数に関する問いである。羊が乾燥に強いこと、豚がイスラム教でタブーとされていることを理解できれば、難しくはなく、基本的な問題といえる。

問2 ヤクとラクダの飼育環境に関する問いである。ヤクが高山、ラクダが乾燥地域で飼育されている家畜であるという知識があれば、解答可能であるため、非常に易しい問いである。少々、解答の助けになる情報が多すぎるように感じる。

問3 飼育頭数の変化と国土開発・食生活の関係に関する問いである。農業の発達と国土開発の状況を理解できれば解答可能であるため、比較的易しい問いである。

問4 肉類の消費量と経済成長や宗教の関係に関する問いである。経済成長のタイミングとヒンドゥー教徒にとって牛が神聖化されている点も踏まえ考えることができれば、解答可能である。複数の知識が必要であるが難易度は標準的であるといえる。

問5 各地域の伝統的な住居の特徴に関する問いである。説明から住居の形が容易に想像可能であるので、難易度は非常に易しいといえる。説明に場所を加えず、スケッチが描かれた場所も選ばせるなど難易度を上げて面白いかもしれないと感じた。

問6 各地域の家畜の状況に関する問いである。イスラム教徒の食文化に関することは、中学・高校で扱う内容であり、容易に解答可能であるといえる。

第3問 アフリカの地誌に関する大問である。地図の読み取りや各種データを使った図表の判別など、例年通りの基本的な事項が多かった。いずれの問題も基本的な知識・技能を問う設問であり、難易度は標準的といえる。

問1 アフリカ各地の地形の様子を陰影起伏図から判定させる問題。示された図における起伏

の垂直部分(高さ)の強調が抑えられていたこともあり、やや分かりにくさを感じるものの、大地溝帯の場所や地形の特徴を理解していれば、解答は容易であった。

問2 アフリカの世界自然遺産でみられる生物を判定させる問題。選択肢の文中に生物とともに、気候の特徴も記されているため、それぞれの場所の特定はそれほど難しくなかった。しかし、世界自然遺産をテーマとして取り上げるのであれば、説明文と一緒に関連する写真もあってよかったのではないか。

問3 小学校の様子を捉えた写真と説明文から、地域を判定させる問題。写真で判定可能な現地の人々の服装などから、アフリカの地域を特定することができ、さらに後の説明文で話されている言語についても言及されているため、解答は容易であった。

問4 アフリカにおける産業分類の年代別推移から地域を判定させる問題。第二次産業の割合に着目すると、その増減が明確に示されているため、産業の高度化の状況から判定は可能である。しかし、西部と南部のそれぞれの産業の特徴を理解していないと、解答は難しかったと思われる。

問5 アフリカの都市人口と農村人口の国別割合から、該当国のグラフを組み合わせる問題。円グラフの大きさは国の人口規模を表しているものの、モロッコ、ナイジェリア、タンザニアのそれぞれの人口規模については、十分理解している受験者は少なかったかも知れない。そのため、農村と都市の人口割合から判定せざるを得ず、難易度はやや高めであった。

問6 携帯電話と固定電話の単位当たりの契約数の推移から判定させる問題。示されたグラフはそれぞれ特徴的なカーブを描いており、アフリカにおける近年の携帯電話普及の状況を知識として持っていれば、解答は容易であった。

第4問 世界の結びつきと地球的課題に関する大問である。昨年度は、地球的課題のみの出題であったが、今年度は2パート構成での出題となった。様々な図をもとに、基礎的な知識や図の読み取りなどの技能を問う問題やそれらを活用して思考力を問う問題が見られた。昨年度と比較すると、探究する場面設定ではなくなり文章量や初見の資料が減少したことで、比較的取り組みやすい問題が多かった。また、地球的課題においてはテーマ設定がなかったため、環境問題や人口問題、食料問題など様々な地球的課題が取り上げられ、地球的課題について包括的に問うことができている。一方で、大問を通してのテーマに基づいた考察や解決策の構想に関する問題が出題されず、旧来のセンター試験の形式に逆戻りしている印象も受けた。次年度から始まる「地理総合」の地球的課題に関する大問では、昨年度に見られた「課題の発見→要因の分析→解決策の構想」といった、探究プロセスを意識した大問構成や問いを分量が重くならないように出題されることを期待したい。

問1 世界地図の分布とそれぞれの国家群に関する知識を問うた問題である。問われていることは世界の国家群に関する基本的な知識であり、難易度は平易である。

問2 日本とアフリカ、北アメリカ、西アジア、東アジアとの1980年と2018年における総輸出額と総輸入額について問うた問題である。シンプルな問題でありながら、日本とどのような貿易品目でつながっているのか、1980年と2018年では各地域とのつながりがどのように変化したのかについて空間軸と時間軸の両面から思考させる良問である。

問3 初見の資料である図3を適切に読み取る技能とそれぞれの発電方法に関する知識を問うた問題である。考察文の内容が資料の読み取りや発電の知識との結びつけで終わっており、資料の良さを十分に引き出しているとは言い難い。資料から、発電方法間の関係性や課題などを読み取ると更に良い問題になるのではないだろうか。

問4 世界の各地域における0～14歳人口と65歳以上人口の人口増減の特徴について問うた

問題である。人口転換の概念をもとに、世界の各地域の人口について考察できる基礎基本をしっかりとおさえた問題であるといえる。

問5 世界のフードロスの問題に関して、ヨーロッパとサハラ以南アフリカの2地域の視点からどの段階での廃棄が多いかについて問うた問題である。先進国と発展途上国の食料流通のそれぞれの課題に関する背景知識を活用する思考力を問うた問題であるといえる。

問6 日本、アメリカ合衆国、スペインのODAの世界各国への供与額について、地理的、経済的結びつきをもとに考察する問題である。地球的課題に関するパートのまとめの位置付けの小問であり、解決策の構想について問う問題を次年度以降は出題して欲しい。

第5問 島根県石見地方の浜田市とその周辺に関する地域調査の大問である。従来の出題傾向である地理院地図を用いた読図の問題、地図や様々な資料をもとに思考力と判断力を働かせて解答する問題、地域課題の取組に関する問題、とバランスよく出題された。難易度は標準的といえる。

問1 中国地方の3都市（日本海側に位置する浜田市、内陸部に位置する三次市、瀬戸内海に位置する広島市）について、1月の日照時間と平均気温のデータと地図から3都市をそれぞれ特定する問題である。各都市の気候の特徴を捉えていれば解答は容易である。

問2 石見地方の各地区における幾つかの商品やサービスの主な購買・利用先を示した図から、何を示した図か、その組合せを選択する問題である。初見の問題であるが、広島市が中国地方の中心都市であることや衣料品・食料品などの最寄り品は身近な地域で購入するという基本知識を踏まえ、地図の矢印が集中する都市の機能や商圏などの広がりを読み取ることができれば解答できる。知識と思考力を活用する良問である。

問3 浜田市の人口分布を示す地図、コンビニエンスストアとまちづくりセンターの立地を示す地図、コンビニエンスストアとまちづくりセンターへのそれぞれの距離別人口割合を示すグラフから、2つの小学校区を判別する問題である。初見の問題であり、地図から2つの施設の広がりや距離などの分布の特徴を捉える学習と示されたデータが何を示すのかを考察する学習に慣れていないと、解答には時間を要す。難易度はやや高く思考力が問われる。

問4 浜田市内の地理院地図に示された4地点について撮影された景観写真を見ながら、会話文の正誤を判定する問題である。従来見られた地理院地図に示された4地点の撮影場所を特定する問いではなく、地図の読図と景観写真の正確な読み取りができた上で、下線部のモータリゼーションや切土や盛り土といった基本用語が理解できていれば解答できる。難易度は標準的といえる。

問5 浜田に関する商品流通に関して、資料と会話文中にあるヒントを手がかりに会話の空欄に当てはまる語句を考察する問題である。資料中の地図と会話文の内容を結び付けて、2つの空欄に当てはまる語句の組合せを選択するが、会話文の示す内容から、どのルートを指しているのかを正確に読み取る必要がある。西廻航路や瀬戸内海・大阪からは砂糖・塩が運ばれ、北海道・東北・北陸からは米・昆布が運ばれるという知識があると選択は容易である。難易度は標準的といえる。

問6 石見地方の過疎問題について、その発生要因と解決に向けた取組について資料をまとめる場面を想定した問題である。提示された具体例について、実際に探究活動する場面を想定しながら思考することができれば解答は容易である。

3 総評・まとめ

全体的な難易度については、「地理A」の学習内容を逸脱することなく、基本的知識を組み合わせ

ることで地理的概念や地理的課題を見出し、それを手掛かりに諸資料を分析・考察し、選択肢と照合させながら正誤を判断させる点において、共通テストに相応しい標準的な問題であると考え。多くの設問に見られたように、地図や統計、写真をはじめとするさまざまな資料から地理情報を読み取るためのスキルが重視されている。ゆえに、高校現場においては、こうしたスキルが一層重視されることが予想される新課程入試を次年度に控えていることもあり、探究プロセスを重視した授業を今後より一層心掛けていく必要がある。すなわち、「知識・技能」をベースに「思考・判断」の過程を踏まえた地理的な見方や考え方の育成を重視した授業づくりが望まれてくるだろう。

4 今後の共通テストへの要望

旧課程に基づく最後の共通テストとなった今回の本試験は、教科書を中心に基礎的事項を学習し、地図帳で世界の概観をおさえ、資料集や統計データ等を用いてさまざまな種類の図表を読み取るためのトレーニングを地道に積み重ねた者にとっては、十分に解答が可能な標準的なレベルの問題であったと考える。これに加えて、「知識・技能」をベースにしながらか「思考・判断」の定着度を問う問題形式であったことから、次年度に実施予定の新課程入試における「地理総合」並びに「地理探究」の試験へ向けての布石となるものであったと解釈できる。一方で、「課題の発見→要因の分析→解決策の構想」という探究プロセスを意識した大問構成や問いについては、昨年と比較して少なくなったように思われる。

上述したことを踏まえ、授業を含め日頃の学習で養われた物事に対する探究心と知的好奇心を大切にするとともに、「主体的・対話的で深い学び」の成果として身につけた地理的な見方や考え方を、日常生活のさまざまな場面に生かすなど、地道にかつ丹念に学習に取り組んだ受験者の成果が最大限に発揮されるような「良問」の出題をこれからも期待したい。

地 理 B

1 前 文

本年度の問題数は30問で、世界の自然環境と自然災害、世界と日本の資源と産業の変化、都市と生活文化、環太平洋の地域、地域調査の大問より構成され、各大問はそれぞれ6つの小問より構成されており、基本的な問題が多い。大学入試センターから、問題作成方針が出され、「地理に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視する」と示されている。このことについては、複数の地理資料から解答を導く問題が出されているが、全体として、このタイプの問題がやや少ないと考える。また「地理的な見方や考え方を働かせて、地理に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を多面的・多角的に考察させる」ことについては、地図を用いて位置や分布を踏まえて解答する問題が、各大問でまんべんなく出題されている。特色や相互の関連について問う問題は、地図を利用してはいないが、位置や分布、地域の特色を理解していないと解けない問題も見られる。ほかに、地域の歴史や地域間の関係性の変化を踏まえた問題も見られる。さらに「地理的な諸課題の解決に向けて構想する力を求める」ことについては、地域調査についての大問で、過疎問題の解決のために必要なことと取組事例を結び付けて考えさせる問題が出されている。

全体の問題形式としては、地理資料と説明文を組み合わせさせて考えさせる問題が最も多く、次いで図で示されている国や都市を答えさせる問題、複数の地理資料を組み合わせさせて考えさせる問題、地図中の凡例が何を示したのかを答えさせる問題が多く見られた。「様々なスケールから地域を捉える問題」については、地域調査の大問に見られ、「知識を基に推論する問題」については、大問ごとに出題されていた。「資料を基に検証する問題」については、会話形式の問題文より読み取ることができる。問題の大半は、系統地理についての問題で、地誌的内容と関連付けた問題も見られたが、地誌の問題は少ない。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

第1問 世界の自然環境と自然災害に関する大問である。地形と気候の成り立ちに関する基本的な事項が問われている。図表の読み取りに時間を要するものがあり、思考力と判断力が問われる。昨年度の間1のような難解な問題はなくなり、難易度は標準的といえる。

問1 世界の大地形の安定地域と変動帯における自然環境の比較に関する問題である。造山運動と気候環境の理解があれば難しくない。共通テストらしい組合せ問題であり、良問といえる。

問2 緯度ごとにみた永久凍土と氷河・氷床の割合に関する問題である。基本的な知識を問うており、大気大循環の理解とグラフを正確に読み取る力があれば容易である。

問3 海岸部にみられる4つの地形の比較に関する問題である。いずれも基本的な地形であり、沈水海岸の違いが正確に理解できているかがポイントである。過去にセンター試験で類似する問題（このうち2つの地形の比較）が出題されたこともあり、学習した知識が直接反映される問題となっている。

問4 4都市の冬・夏の日照時間の比較に関する問題である。各都市の緯度、雨季・乾季、雲量などを考慮すれば答えを導き出すことはできる。ただ、降水量ではなく、日照時間を問うているところが難点である。受験者が日照時間そのものを学習することはほとんどない。初見の問題であり難易度は高く、解答には時間を要す。

問5 4か国の洪水災害の発生時期の比較に関する問題である。各国の洪水災害の要因を推測し、緯度と気候条件の違いを組み合わせることが必要となる。初見の図ではあるが、過去の

センター試験において河川の季節別流量の変化に関するグラフが出題されたことがあるので、同じように考えることはできる。防災を意識した良問といえる。

問6 3つの指標による気象観測データの分布図判読に関する問題である。緯度と沿岸部・内陸部の違いを踏まえ、それら指標の最大記録をもたらしている要因を想定して答えを導く。これも初見の図であり、解答に時間を要す。難易度はやや高く、思考力が問われる。

第2問 資源と産業に関する大問である。鉄鋼業を事例に、「世界と日本の資源と産業の変化」をテーマにした地理での探究学習を想定し、地図、統計、航空写真、会話文などの資料を読み取る過程を通して、個別的知識を活用しながら概念的知識を見出すとともに、社会的課題の発見へとつなげることを意図しているものと思われる。6つの小問いずれもが知識・技能を基盤に思考力・判断力の習得の程度を試すものとなっており、標準的な難易度といえる。

問1 鉄鋼の原材料となる鉄鉱石の産出量、輸出量、輸入量いずれかの世界全体に占める割合を、国別に示した3種類の世界地図を比較・考察しながら合致するものの組合せを選択する問題である。関係各国の貿易体制や経済・産業政策、工業化の進展、世界的な石炭の分布の特徴について理解できれば、解答は容易である。

問2 日本の鉄鋼業の発展に伴う製鉄所の立地の変化について、4種類の地図と会話文とを照らし合わせながら考察し、会話文中の誤りを4つの選択肢から判断する問題である。1910年、1940年、1974年、2022年の各時代における製鉄所の立地の特徴について、当時の国内外の社会情勢との関わりから理解できれば解答は容易である。正答となる会話文②の「国内に埋蔵される原料や燃料が枯渇して」に関して、日本では石炭は現在も枯渇しておらず、採掘コストの上昇により安価な海外産に押され、採算が合わなくなったことから生産停止となっている。

問3 石炭の貿易を通じた日本と関係各国との結びつきの変化について、アメリカ合衆国、インドネシア、オーストラリアの3か国からの輸入量の推移を示したグラフと、各国の石炭に関わる社会事情の特徴について記した文章とを照らし合わせながら考察し、合致するものの組合せを選択する問題である。3か国それぞれの特徴を文章から理解し、それをもとにグラフに示す推移の特徴を読み取ることができれば解答は容易である。

問4 イギリス、中国、ドイツ、ベトナムにおける1990年と2018年の「GDPに占める製造業の割合」と「人口一人当たりの製造業付加価値額」を、グラフの縦軸と横軸それぞれにプロットした上で、それらの相関関係について考察する問題である。前者と後者のいずれもが上昇傾向にある場合、経済発展の著しい新興国と特定できるが、そうでない場合は製造業が衰退傾向にある先進国と特定できる。ここでは先進国に属するドイツに該当するものを選択するが、その場合イギリスとの比較から判断する。両国における産業構造の変化の特徴や工業への政策の違いについて理解していれば解答は容易である。

問5 日本国内の製造業の変化と地域への影響について、1988年と2008年の大都市圏のある地域における航空写真を、工場閉鎖前後における土地利用の変化について記された文章と照らし合わせながら読み解き、文章中の誤りを4つの選択肢から判断する問題である。両年度間に生じた社会情勢の変化について理解していれば解答は容易である。正答となる文章中①の繊維工業の「国内農村部に工場移転」に関して、1988年当時は既に円高に伴う経済のグローバル化が進行しており、発展途上国への移転が顕著であった。

問6 製造業が地域社会に及ぼす様々な影響を踏まえ、資源や産業をめぐる3つの新しい取組について、各々の目的との関わりから考察する問題である。ここでは、各目的に合致する具体的な取組についての組合せを選択する形式を採っており、目的と取組の両者について記された文章を理解する力が備わっていれば、十分解答は可能である。かなり平易な問題として

位置付けられる。

第3問 都市や生活文化に関する大問である。写真や図表の読み取りを通じて、地理的技能や思考力を問う問題となっている。昨年度の第3問は、日本の人口や都市について、例年第5問で出題されている地域調査のような探究学習を意識した出題だったが、今年度は従前に近い出題形式になっている。問1～問5まで都市問題に関する問題で、出題分野の偏りがあると思われる。全体としてはやや易しめの難易度に設定されていた。

問1 都市の景観写真から、地域の変貌を類推する問題。人口問題や都市問題の背景を把握していれば解答できる、平易な問題。長年、指摘しているが、写真が不明瞭であり、濃淡やコントラストを配慮してほしい。

問2 日本の都市の昼夜間人口比率とその都市への主要な交通手段の割合から、各都市を類推する問題。中央区には東京都心、調布市には東京郊外とあり、その場所を知らない受験者でも解答できる工夫がされている。地方中枢都市やモータリゼーションが進む地方都市の特徴を考えた上での表の読み取りで、地理的思考力を問う良問。標準的なレベルの問題。

問3 先進国、BRICS、発展途上国の都市人口の増加に関する問題。BRICSや発展途上国における、経済成長に伴う急激な人口増加と、それに伴う都市問題を踏まえれば解ける問題。インフォーマル・セクターから小売業・サービス業を導く点が、受験者にとっては解答に時間を要したかもしれない。標準的なレベルの問題。

問4 都市圏の人口規模に関する問題。オーストラリアの都市の特徴、発展途上国の都市に多くみられるプライメートシティの特徴を把握していれば解答できる、平易な問題。

問5 都市圏内部の特徴を表現した主題図の読解問題。主題図を丁寧に読めば解答できる問題で、地理的技能を問う問題。大学受験の問題であることを踏まえると、選択肢の文章にてもう少し思考力を問うなどの一工夫が欲しい。やや易しめの問題。

問6 使用されている言語の割合から、アメリカの都市を類推する問題。民族を言語で捉えているが、各地域の民族分布の特徴を踏まえていれば解ける、標準的なレベルの問題。

第4問 環太平洋の地域に関する大問である。いわゆる「現代世界の地誌的考察」からの出題であり、環太平洋地域の多様性に注目させる出題意図が見受けられた。しかしながら、その多様性かつスケールの広さゆえに、「現代世界の系統地理的考察」から出題されるような問題が多く、また、地域的特色や地球的課題の観点から地域を動的に扱うまでには至っていない。難易度は、資料の読解に時間を要する問題が幾つかみられ、やや難しかったのではないかと考えられる。

問1 太平洋における多様な海底地形を断面図で判断する問題である。ホットスポット、サンゴ礁地形(グレートバリアリーフ)、海溝の形成過程や特徴、位置の理解をもとに、思考力を試す問題として評価できる。ただ、地形の形成過程や特徴をイメージできていなければ解答するのが難しく、受験者にとって差がつく問題であったと思われる。

問2 民族衣装の多様性をもとに、気候の特徴と関連付けて考える問題である。単に都市の位置からハイサーグラフを判断するのではなく、生活文化の観点から当該地域の自然環境の様子を推測させる問題は、思考力や判断力を問うている点で評価できる。難易度も適当である。

問3 3か国の一人一日当たりのたんぱく質供給量を比較しながら考える問題である。日本を判断する場合は魚や大豆の供給量に着目し、また、欧米諸国では肉の供給量が多いことが理解できていれば容易に解答できる。身近な食文化を起点として、日本と他国とを比較しながら判断させる問題であり、良問といえよう。

問4 環太平洋の島嶼国・地域と、出発地域別の観光客数の割合との関係を判断する問題である。図のデータは受験者にとってなじみがなかったように思われるが、グアムはアジア、ハ

ワイは北アメリカ、フィジーはオセアニアといったように、地理的近接性の視点から解答できるようになっている。とはいえ、現在の環太平洋の島嶼部では、アジアから多くの観光客がみられるため、解答に悩む受験者もいたであろう。

問5 4か国の貿易輸出額の変化について、相手国との特色を考察しながら判断する問題である。現在、米中が世界貿易の中心を担っていること、近年において中国の鉄鋼業がオーストラリアの鉱産資源に支えられていることが理解できていれば解答を導くことが可能である。ただし、資料の読み取りが難解で、まずは図の意味を理解するのに時間を要する。受験者にとっては厳しい問題だったといえよう。

問6 日本企業が、環太平洋地域に進出する様子について問うた問題である。製造業で学習する国際分業体制のことが理解できればすぐに解答でき、基本的知識を反映した平易な問題である。ただし、図の読み取りとは関係なく解答が可能である。

第5問 (「地理A」と共通のため省略。)

3 総評・まとめ

全体的には、従前に近い出題形式となり、容易な問題と標準的な問題が多く、なかに初見で資料の読み取りに時間を要するやや難しい問題も見られた。いずれの小問も地図(15点)、グラフ(13点)、写真(3点)、図(2点)、表(5点)などの資料を読み取り、これまでの学習で得た知識や技能と結びつけ、思考力や判断力を働かせて解答するものとなっている。語句の組合せを答えさせる問題が16問、語句の組合せを考えてそのうち1つを答える問題が9問であった。近年、高校では探究学習が進んでいるが、社会的課題に気付き、課題解決につなげることを意図している問題も見られた。

大問ごとに見ると、第1問は、地形と気候について基本的な事項が問われ、難易度は標準的である。第2問は、資源と産業について、これまでの学習で得た知識や技能を活用して思考力・判断力を働かせて解答できるかが問われ、難易度は標準的である。第3問は、都市や生活文化について、写真や図表の読み取りを通じて地理的技能や思考力を問う問題で、難易度はやや易である。第4問は、環太平洋の地域について、資料の読解に時間を要する問題が幾つか見られるため、難易度はやや難である。第5問は、地域調査について、読図や様々な資料を活用して思考力と判断力を問う問題、地域課題の取組に関する問題とバランスよく出題され、難易度は標準的である。

4 今後の共通テストへの要望

本試験で気になった点を、以下5点指摘しておく。第1は、図表を用いた出題が多いため、写真(濃淡やコントラストの工夫)において、配慮の必要な受講生を考慮して、分かりやすさを求めて細心の注意を払っていただきたい。第2は、バランスの取れた出題が見られる大問もあるが、なかに出題分野の偏りが見られる大問もあった。第3は、図表を利用して考えさせる問題のなかで、図の読み取りとは関係なく解答できる問題が見られたことである。第4は、問題の大半は、系統地理についての問題で、地誌的内容と関連付けた問題も見られたが、地誌的問題が少なかったことである。学習指導要領では、地域的特色や地球的課題の観点から地域を動的に扱うことを求めているが、今後の出題で検討していただきたい。第5は、語句の組合せを答えさせる問題がほとんどで、多様な出題ができないかを検討していただきたいことである。

「地理総合」と「地理探究」の試験に向けた出題が見られ、生徒の学習場面を取り入れた工夫もなされており、年々改善されてきているが、今後とも、地道に学習に取り組んできた受験者の成果が表れるような出題を期待したい。

② 全国地理教育研究会

(代表者 高橋 基之 会員数 約300人)

T E L 03-3958-0121

地理A・地理B

1 前 文

平均点は、「地理A」で55.75点（前年度との比較で+0.56）、「地理B」で65.74点（同+5.28）となり、「地理A」では前年度と同じ程度、「地理B」では小問2問程度の易化となった。今年度は共通テストへ移行して4年目、旧課程としては最後であったが、全体として学習の過程を意識した場面設定からなる大問や、高等学校までの学習内容に沿った小問が多く見られた。また、地理的見方・考え方を踏まえながら、知識・理解をもとに思考力や判断力を働かせて解答する問いが多く出題された。学習範囲を逸脱した難問や奇問は、今年度もほとんど見られなかった。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

(1) 「地理A」への評価

今年度も、各小問に図や表、写真などを含めた豊富な資料が提示された。それらの資料が提示されず、正しい文章選択のみからなる小問は30問中1問だけであった。また、組合せ選択の小問が30小問中20問を数え、昨年度よりも増加し、解答には多くの時間を要した。しかし、基礎的な知識・理解をもとに思考・判断する学習の過程を意識した問が多く、また、細かな知識レベルを前提とした難問も見られず、おおむね適切なレベルに作問された。

第1問 「地図の読み取りと活用、及び日本の自然環境と防災」 本年度も大問タイトルに「自然災害」が加えられた。後半の2小問が自然災害に関するもので、大問全体としては自然環境と人間生活との関わりの大問との印象が強い。写真や地図を丁寧に読み取った上で、思考・判断ができたかが正解への鍵となった。なお、昨年度久々に出題された小縮尺の地図投影法に関する小問は、本年度は出題されなかった。

問1 スケッチが描かれた地点と方向について、地理院地図からの読み取りと、噴火後の湖の形成要因との組合せ選択の小問。スケッチ地点の判別は容易であるが、山体崩壊をイメージした後、カルデラ湖と堰止湖の説明を読んでどちらか判断する必要があるため、総合するとやや難。

問2 GISを用いた分析についての文章選択問題。本年度「地理A」、「地理B」を通じて唯一資料がなく、文章選択のみの小問。地図化される情報と、そこから読み取れることを丁寧に考えていけば正解可能。難易度も低い。

問3 ある地域の発行年度が異なる3枚の地形図についての読み取りで、標準的な難易度。自然堤防と後背湿地の土地利用の相違と、土地利用の変化が問われた。自然環境の大問では、センター試験時代も含めて自然環境そのものの理解を問う小問や、自然環境と災害や防災面でのつながりを問う小問が多くなっていた。本問は自然環境と人間生活との関連を問う地理の典型であり、そうした視点から良問と評価したい。

問4 地理院地図から植物に関わる土地利用を読み取り、地域による光合成の活発度の高低を判別する小問。地理院地図の読み取りに加え、米栽培の生育過程を踏まえながら季節による光合成の活発度の相違を問うもので、工夫された小問として評価したい。難易度はやや難。

問5 気象衛星画像から季節を読み取り、それぞれの季節に応じて人間社会の側が行う備えとの組合せを選ぶ小問。単に季節を判別して組み合わせる問ではなく、共通テスト化以降に定番となっている人間社会との関わりを問う形となっている。難易度はやや易。

問6 災害に関する地図の読み取りの文選。洪水と津波で参照する図を変えながら、3行ある肢文を読むのにやや時間を要するが、丁寧に読み取りができれば正解可能。やや易。

第2問 「家畜に関する世界の生活・文化」 生活・文化を問う大問で、タイトルどおり家畜に関する小問で完結されている。昨年度の大問は内容的に「地理B」での「資源と産業」に近いとの印象であったが、本年度は家畜を切り口に自然環境や歴史、宗教との関連性から衣食住を問うものが多く、「生活・文化」に相応しい大問となった。

問1 羊と豚の飼育頭数の地域別割合に関する小問。オーストラリアの羊と中国の豚の飼育についての知識を問うもので、難易度は標準的。統計資料に準拠した知識があると解答しやすかったかと思われる。

問2 ヤクとラクダの飼育地域の分布と気候的特色の相違を問う小問。ラクダについての知識で正解を得られる易問。

問3 3か国の牛の飼育頭数と飼育環境、その後の生産と消費の特色に関する小問。それぞれ国の牛の飼育頭数の推移についての知識と、肢文で説明されている内容に関する知識を掛け合わせて思考・判断する必要がある。「地理B」の産業分野での出題に近い問という印象。難易度はやや難。

問4 3か国の食生活の変化と宗教上の禁忌に関する小問で、易問。

問5 3地域の遊牧における移動用住居に関する小問。移動用住居のイラストと、住居の特色と分布地域との組合せ選択で、易問。ミで示された移動式住居については、中国内陸部のものが出典に記されていたと思われるが、教科書等での扱いも多いモンゴルに関するものからの出題でも良かったか。

問6 家畜の飼育や家畜に関わる生活・文化についての下線部に関する正誤判定の小問。誤文の誤り方が明白で、下線部を丁寧に読んで判断できれば正解可能。易問。

第3問 「アフリカ」 統計資料に依拠した組合せ選択問題から構成され、「地理B」的であった一昨年度と比較すると「地理A」らしい大問であるが、「地理A」らしいと評価が高かった昨年度と比較するとやや「地理B」的な大問であった。これまでも「地理A」と「地理B」の差異を明確にすることには困難が多かったと思われるが、来年度からの「地理総合」と「地理探究」においては、それぞれの特徴が明確となる作成が望まれる。

問1 4地域の起伏を、地形の起伏のみが表現された図から判別する小問。図から起伏の大小や火山と判断できる地形は判断できるものの、4つの地域の地形に関して、山脈や地溝帯の走る方向等までの知識が必要で難易度は高い。「地理A」よりは「地理B」での出題が適当と思われる。

問2 3地点の世界遺産でみられる動植物に関する小問。各地点の気候の特色を問うものとなっている。難易度はやや難。海岸砂漠や南半球の地中海性気候となる地域まで学習できていたかが問われた。

問3 2か国の言語と宗教に関する小問。写真中の生徒の服装を手掛かりに、世界の言語や宗教分布と結び付けて判断する必要がある。植民地化によって英語がもたらされた地域及びスワヒリ語が東アフリカ沿岸部に話者が多い言語である知識があれば、サとシの判別もできたか。難易度は標準的。

問4 アフリカの産業について、南アフリカ共和国が含まれるアフリカ南部の経済水準が高い

ことについて問われた。経済水準の高い地域では第1次産業比率が低く、第3次産業比率が高いことから正しい組合せを選択する小問で、難易度は標準的。

問5 アフリカの人口上位20か国の総人口と都市人口割合についての小問。ナイジェリアの位置と、アフリカ最大の人口を持つ国であることが分かれば、Qとマの組合せは解答可能。モロッコは、隣国アルジェリアと同様に乾燥した気候であることを根拠に都市人口率が高いと予想すれば正解できたか。タンザニアは、教員であれば比較的人口が多いことの知識もあるが、タンザニアを判断材料とした受験者は少なかったのではないか。難易度はやや難。隣国の傾向を参考にする視点や、気候や経済発展に応じて都市化が進展するといった視点から判断させたい作問の意図があったと思われるが、取り上げる3か国には改善の余地があると思われる。

問6 アフリカにおける携帯電話の普及に関する小問で、易問。

第4問 「世界の結びつきと地球的課題」 タイトルに「世界の結びつき」が復活し、Aパートの2小問に加えてBパートの1小問についても「世界の結びつき」に関するものであった。探究場面を想定した大問ではなかったこともあり、昨年度のような出題分野の偏りはなかった。来年度以降も出題分野が偏ることがなく、幅広い分野から出題されることが望まれる。また、本大問は細かな事象を問うこともなく、テーマに沿って大観する視点からの出題が続くという意味でも評価できる大問となっている。

問1 OPEC, ASEAN, USMCA (旧NAFTA) に関する小問。選択肢イの説明する国家群が3つの中で最も遅く結成されたと記されているが、図1の注では2019年時点の国家群を示していること、USMCAの発効は2020年であることを考えると、USMCAについて問われているのか、NAFTAについて問われているのか迷った受験者もいたのではない。また、他の2つが現存する国家群であることと歩調を合わせるのであれば、図1の作成年度はUSMCA結成以降に合わせるのが適切だったと思われる。難易度としては標準的。

問2 日本の貿易相手地域に関する小問で、どの地域も特徴が明確に示されている中、西アジアを答える問題。西アジアは日本にとって主要な石油の輸入先であり、1980年も2018年も縦軸（輸入軸）に寄ることなどから判断。図示したことで日本と諸地域との貿易を通じた結びつきの変容が一目瞭然となり、工夫されたものとして評価したいが、受験者にとっては図の読み取りに苦戦したことも考えられる。難易度としては標準。

問3 ドイツにおける、ある1週間の電源別発電量と電力需要量の推移に関する環境問題についての小問で、図と下線部を照らして丁寧に判断していけば正解は容易。電源別の発電量が非常に具体的に表されている資料で、電源別に得意・不得意なことや活用方法を考えること、需要量の波という側面から発電を考える好資料である。

問4 年少人口と老年人口における地域別の人口推移に関する小問で、人口問題を大観できていれば正解を得られる易問。アジアとアフリカの傾向の違いが学習できていたかが問われた。

問5 食料廃棄についての小問。消費段階での廃棄割合の違いで、ヨーロッパとアフリカの判別はできるが、食料名の判別まで正解するとなると難易度はやや高い。食品廃棄について問題提起するという視点から見ると示唆的な資料だった。

問6 3か国におけるODAの国別供与額における供与先地域の分布の特色についての小問。供与元と供与先の距離的近接性や歴史的観点からのつながり、供与額の大小を手掛かりに判断。難易度はやや易。

第5問 「島根県石見地方の地域調査」 前年度の利根川下流域とは異なり、これまで定番となってきた地域の区切り方からの出題。地形図（地理院地図）より作成された図、その他の地図、

表, 写真といった資料を多用した小問が並び, それらの資料を読み取りながら思考・判断していく構成は今年度も継承された。その中で, 問2や問3のように資料の読み取りや設問の意図の解釈に時間を要するものもあったが, 例年と比較して解答時間に時間を要することはなかった点は評価したい。地形図(地理院地図)については, 今年度「地理B」においては, 「地理A」との共通の地域調査の大問でのみ扱われた。来年度以降の「地理総合」並びに「地理探究」では, 少なくとも共通する「地理総合」の大問において地形図の読図を用いた小問が作成されることを望みたい。なお, 今年度は問5のように, 対象地域以外の地域との関わりが出題された。来年度以降も, 対象地域と対象地域以外との関わりや, 対象地域を他地域と比較しながら地域の特色を考察していくような小問の作成を期待したい。

問1 日本海沿岸, 中国山地山間部, 瀬戸内海沿岸の気候に関する小問。「地理B」第1問の問4と同じく, 降水量ではなく日照時間を指標に用いている。難易度はやや易。

問2 3つの商品・サービスにおける購入・利用のための移動距離の相違についての小問。商品によって買い物行動に違いがあることを念頭に, 図を読み取り思考・判断するもので, 共通テスト移行後の特色が現れた問として評価したい。難易度としては標準的。

問3 与えられた図やグラフを読み取りながら, 各校区におけるそれぞれの施設への移動距離の違いについて問う小問。前問に続いて, 地理的な見方・考え方を問う工夫された問として評価したい。小学校区a～cの組合せではなく, 施設をふせたことで難易度は上がっている。施設数の少ないコンビニエンスストアを手掛かりに, 3km以上人口が小学校区bとcでどちらが多くなるか, 資料と照らして丁寧に判断する必要がある。やや時間を要し, 難易度としてもやや難。

問4 写真に示された地点やその周辺の地形図を読み取って, 会話文中の下線部の正誤を判断する小問で, 難易度は易。「地理B」においては, 唯一の地形図(地理院地図)読み取り問題であったが, 正解となる選択肢は地形図が読み取れずとも写真と会話文だけで誤文と判断できる。出題にあたってはもう少し工夫がほしかった。

問5 江戸時代の西廻り航路に関する小問で易問。歴史的背景を踏まえた地理的事象についての理解に関する問で, 工夫されている。

問6 過疎地域の活性化に必要なことを考える, 地理的な課題の解決に向けて構想する力を問う小問。こうした力の育成は必要不可欠であるが, 本問のように共通テストで扱う場合には難易度の低い易問となりやすい。

(2) 「地理B」への評価(「地理A」との共通問題を除く)

大問構成と内容については, 第3問が「都市と生活文化」となったが, 基本的構成は昨年度と同様であった。今年度も図や写真, グラフ, 表などの資料が豊富で, 組合せ選択の小問も昨年度とほぼ同数の16問を数え, 解答に多くの時間を要した。しかし, 昨年度までに比べると取り組みやすい小問が多い一方で, いたずらに時間を要する小問も少なく, 昨年比で5.28点の平均点上昇につながったと思われる。新課程の初年度となる来年度についても, 変化を意識して作り込み過ぎたと思われるような大問が作成されることのないように望みたい。全体を通して解答そのものに迷う難問はみられず, また, 例年に比べて上位層が高得点を取りやすいものとなったと思われる。来年度以降の新科目においても, こうした点についても継続されることを望みたい。

第1問 「世界の自然環境と自然災害」 世界図は本年度も用いられなかった。問2や問4は, かなり広い範囲を意識したものであったが, 世界図を用いながら世界を大観させ考察させるような小問の作成が望まれる。また, 「地理B」では, 地形や気候と人間生活との関わりについての内容はほとんど見られなかった。地理において地形や気候を学習する意味を考えれば, こう

した内容に関する作問を、災害に関連するもの以外にも積極的になされることを期待する。なお、今年度の第1問は、昨年度に引き続いて標準的な難易度の小問が多く、大問全体として取り組みやすいものであった点は評価したい。

問1 ニュージーランドが新期造山帯地域で標高が高い地域が分布していることと、イギリスの牧草地比率が50%を超えることの2つの知識で正解を導ける標準的な難易度の問。地理的な見方・考え方を問うのであれば、ニュージーランドでは山岳氷河の形成がみられる山脈が連なる南島で人口密度が低いため、森林率が高いことを類推して解答を導くような問の作成が望まれる。初問にしてはややミクロな視点の問いだったか。

問2 両極を含む高緯度地域には、極高压帯が広がり降水量（降雪量）が少ないという知識を問うもので、難易度は標準的。

問3 4つの海岸地形の成因を問う易問。基礎的な知識をストレートに問うもので、こうした問が多くなれば平均点は上昇する。いわゆる学習者が得点を実感できた問いとして評価したい。

問4 解答を求められたムンバイは、モンスーンの影響による冬季と夏季の違いが明瞭な気候下の都市であり、夏季の日照時間が短くなると判断する。都市の位置を既存の知識としている小問であるが、都市の位置を示した地図を基に思考・判断させる問にしてほしかったというのが現場の声として多く上がった。オスロは高緯度に位置し、1月の日照時間が2時間未満となることから判断、ローマは夏に高温乾燥となり、日照時間が長くなることから判断する。シドニーは中緯度かつムンバイのような雨季・乾季はない温暖湿潤気候である。日照時間を用いた点や、見せ方の工夫された問いとして評価したいが、難易度は高い。

問5 カナダの融雪期の洪水と、メキシコのハリケーンの襲来する季節から正解を得られる標準的な難易度の問い。多くの受験者は、コロンビアとボリビアについては考えずとも正解を得られたであろう点はもう少し工夫が欲しかった。赤道低圧帯の移動に関連して、コロンビアでは平均して降雨があり洪水が発生すること、メキシコとボリビアの雨季が交替することから洪水の発生時期が異なることを考えて正解を得られる問いを期待していたのかも知れない。

問6 隔海度が大きい内陸部では夏の日中に気温が上がりやすいこと、台風の通過しやすい地域は最大風速が大きくなりやすいこと、海洋に面した風上斜面では降水量が多くなりやすいことが問われた小問。難易度は標準的。リード文の指示量と資料が精選されており、共通テストらしい仕上がりの問い。

第2問 「世界と日本の資源と産業の変化」 鉄鋼業を含めた製造業に特化した大問。一昨年度は、エネルギー資源の利用と環境への影響に特化し、昨年度は第1次産業が過半であったものの、他の産業分野からも出題されていた。受験者のこれまでの学習に応える意味では、産業の各分野からの幅広い出題を望みたい。易問が多く、難易度の低い大問で、全体の平均点を引き上げたものと思われる。

問1 鉄鉱石の産出量、輸出量、輸入量の上位国に関する問で、今年度の平均点の上昇を手助けしたであろう易問。これもいわゆる学習者が得点を実感できたという面では評価したい。

問2 製鉄所の立地の変化についての小問。鉄鋼業の鉄鉱石と並ぶ主要原料であり燃料ともなる石炭の国内での産出量が大幅に減少した時期は、高度経済成長期であった点を問うたもの。これも易問で、平均点を上昇させた。

問3 3か国について、石炭における日本との貿易量の推移と、3か国の産業や石炭消費の特色とを組み合わせる小問。各文に3か国を特定しやすい語句が含まれており、標準的な難易度。

問4 製造業付加価値額が高い2か国の中で、付加価値額が下がり製造業の割合の減少幅も小さいものをドイツと判断する小問。4か国の経済水準と現在の状況を考えながら、グラフを読み取って取り組む小問で、問い方は単純であるが、共通テストらしい仕上がりで評価したい。難易度は標準的。

問5 日本の大都市圏における変化や、先進国と発展途上国との製造業における特色の違いなどについての小問。設問で示された年代の繊維産業の移転先が、労働力が豊富で安価な発展途上地域であること理解していれば正解を得られた易問。

問6 資料中に示された目的と、資源や産業に関する新しい取組とを組み合わせる易問。問5に引き続き平均点の上昇に貢献したと思われる。

第3問 「都市と生活文化」 「生活文化」がタイトルに加えられた。出題数は1問だけであったが、本大問においては久しぶりに生活文化の内容からの出題がみられた。昨年度の大問タイトル「日本の人口や都市」では、海外の人口や都市に関する内容が少なかったが、本年度は日本と世界からバランスよく出題された。また、昨年度の第3問の難易度は比較的高かったが、今年度の難易度は標準的なものであった。

問1 3つの地域が示された写真と、地域の特色を示した文とを組み合わせる都市の内部構造に関する小問で、易問。

問2 4市区における昼夜間人口比率と主要交通手段の割合が示された表から、福岡市を判別する小問。福岡市が九州地方の広域中心都市（地方中枢都市）であり、秋田市に比べて鉄道交通が発達していることへの理解が求められた標準的な難易度の問い。

問3 BRICSが豊富な資源や労働力などを背景に経済発展が続き都市圏への人口流入が著しいことと、流入した人々が専門的な知識をそれ程には必要としない単純労働に従事する場面が多いことを問う小問。グラフなどの資料の読み取りと、文中の空欄の適語とをそれぞれ答えて組み合わせる近年定番の問い方。力とキを判別するグラフの読み取りがやや難しい。

問4 グラフに示された3か国の上位都市間の人口規模の相違を読み取る小問。発展途上国のプライメイトシティ（首位都市）とオーストラリアの二大都市についての出題で易問。

問5 フィラデルフィアとメキシコシティの貧困地区の分布に関する図の読み取りの小問。図から直接読み取れる内容での誤りで、これも易問。

問6 アメリカ合衆国内の4都市の家庭内での使用言語に関する小問。地域による使用言語の特色を問うもの。ヒスパニックとアジア・太平洋系の割合の多寡から判断する。難易度は標準的。

第4問 「環太平洋の地域」 インドと中国という連続した地域が取り上げられた昨年度に続いて、今年度も環太平洋地域という広範囲な地域からの出題となった。共通テストへの移行後、地誌に関する大問が2大問から1大問となったことの影響が大きいと考えられるが、対象範囲を広げているため、様々な国・地域に関する出題が可能で、問題の幅が広がっている。しかしその一方、広範囲を扱っているため、第1問～第3問までの系統的な分野からの出題との差異があまりみられない。難易度は大問全体としては標準的であるが、問1や問5など難易度が高い小問もみられた。

問1 プレート境界の位置や、プレートの形成や移動に伴う地形についての基礎知識から、4か所の海底地形の断面図を判別する小問。正解となるBの地域は、ホットスポットがプレートの移動とともに火山列を形成してきた地域であり、海溝や海嶺の位置を大観しているだけでは正解を得られず、難易度の高い小問となった。

問2 ハイサーグラフとハイサーグラフで示された地域の衣服について組み合わせる小問で、

易問。

問3 各国のたんぱく質供給量についての小問。乳製品の多いカナダは容易だが、日本とベトナムは判断に迷った受験者もいたのでは。チリを明かすことが他の3か国を答える一助となったとも言いがたい。相対的に魚や乳製品が多くなるキを日本と判断できるかがポイントだったか。難易度は標準的。

問4 太平洋地域の4つの島嶼国・地域における観光客の出発地域の特色に関する小問で、タヒチとフランス本国との関係性が理解できていれば正解を得られやすい。2024年パリオリンピックではタヒチがサーフィン会場となる予定であり、そうした国際的なイベントとの時期的近接性も意識された問だったか。難易度としてはやや難であるが、初見の資料について、各国・地域の他地域との近接性や、歴史的なつながりから判別させるもので、見方考え方を問う良問としたい。

問5 4か国の貿易についての小問。解答を求められた中国は貿易量の増加から判断でき、難易度は高くない。しかし、図の示し方が定番のものではない初見のものであるため読み取りにくく、正解率を下げたと思われる。

問6 日本企業の環太平洋地域への進出についての文章選択問題。単純な図の読み取りと図に関する関連知識を問うものが2つずつで、易問。

3 総評・まとめ・要望

今年度は旧課程の最終年度であり、来年度から始まる「地理総合」、「地理探究」の試行問題と合わせて、移行期特有の注目の仕方がなされた年度だったように思われる。共通テストに移行して4年、豊富な資料を読み解き、地理的見方・考え方を駆使して解答を導くことに加え、大問全体を貫くテーマの設定や、探究的な学習の場面を想定した出題が板についてきたように思われる。初見の資料であっても、高等学校での学びの中で得た知識や、地理的見方・考え方を働かせ、現代世界の様々な事象の特徴や本質を見抜く力を育むといった姿勢が出題を通じて感じられ、評価できる点である。

大問数は、「地理A」も「地理B」も5大問6小問ずつで昨年度からの変更はなかった。また解答数は、昨年度見られた小問1つに2つの解答を求める問いがなくなり、「地理A」、「地理B」とともに31から30と、1減となった。本試験と追・再試験とで解答数が揃うことについても、来年度も継続を願いたい。

解答時間については、今年度も異なる内容と考えられるような複数の事項について検討し解答する2×2の4択等の組合せ選択の小問を含め、組合せ選択の小問が多く、じっくり見直す余裕のない状況であったと予想する。一方、共通テスト試行問題や共通テスト初年度と比べて、資料数や出題方式について精選された印象があり、そうした作問が「地理B」において平均点の上昇をもたらした要因の一つと考えられる。受験者がじっくりと問題に向き合い、解答できるよう、少なくとも今年度の小問数が維持されることを望みたい。また、難易度の調整について、「地理総合」、「地理探究」とともに、少なくとも今年度の「地理B」と同程度となるようお願いしたい。

新課程初年度である来年度に向けては、知識偏重の問題となることへの批判から、読み取りや考察の過程を重視しすぎ、返って複雑な構成の問題とならないように願いたい。また、教科の本質とも言える地理的見方・考え方とはこうしたもので、それを駆使することで現代世界の諸事象をこのように探究し、解釈できるのだという、現場の教員の手本となるような作問を求めたい。その上で、例えば「地理総合」だけではなく、「地理探究」に関わる大問においても地形図（地理院地図を含む）から主題図まで、様々なスケールで世界を捉えさせる地図が活用されることを望む。